
私は”誰”でしょう？

かるねす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私は”誰”でしょう？

【NZコード】

N1671Z

【作者名】

かるねす

【あらすじ】

とある”人物”的な独白が大部分を占めています。ピクシブの小説にも同時に投稿しています。

(前書き)

誰が話しているのか、想像しながら読んでいただけすると嬉しいです。

貴方と出会ったのは、貴方が大学を卒業して、社会人になったころでした。

その時の貴方は、これから始まる新しい生活に、目をきらきらと輝かせながら、闘志に満ち溢れていましたね。

初めて会ったあのときから、もう私は貴方に惹かれていたのかも知れません。

温かい春の日に、桜の木の下をゆっくりと歩きます。薄桃色の花びらが目の前をかすめて落ちていく間に、私はただただ驚いていました。

見上げると、水分を多く含んだ空はぼんやり淡い水色で、まだ少し冷たさの残る風が吹き抜けていきます。頬がひんやり冷えてしそうで、貴方は「少し寒いな」なんて言いながらも、笑っていましたね。

新緑がぐんぐんとその枝葉を伸ばし始めたころ、貴方は少し疲れた表情をしていました。

周りの人に心配をかけたくなくて、「大丈夫?」と聞かれても笑つて、「平気だよ」と答えていました。

でも、私は知っています。上手く仕事が出来なくて、会社への道のりがとても長く、重いものになりつつあることを。心の中では、とても不安で悲鳴を上げていたことを。

私がもつと貴方の支えになれたらいに、と考えるよつたになりました。

仕事に慣れて、少しづつ深い内容に発展し始めたのは、蝉時雨の止まなかつた、夏真つ盛りの時期。

先輩に褒められたのが凄く嬉しくて、帰り道の途中、一緒にお祭りに行きましたね。

屋台前で、子どもみたいにはしゃいで、私がソースまみれになつて、貴方が慌てていたのが懐かしく感じます。

濡らしたハンカチで、そつと私の汚れを拭いながら、困った顔で笑つた貴方。その笑顔が今でも忘れられません。

空気が澄んでいて、空がとても高く感じられたあの秋の日。いつもよりも足取り軽く、会社に向かう貴方を見て、疑問に思つたのはつかの間でした。

ずっと取り組んできたプロジェクトが、ついにゴーサインが出たんですね！取引先へ足繁く通り、何度も頭を下げていた貴方の努力が認められて、最後はにこやかに、それでも握る手は力強かつた。私も自分のことのように嬉しくなりました。

……貴方が、取引先を出た後、ガツツポーズをしていたのを知つているのは、私だけの秘密です。

数年ぶりに大雪が降つたあの日。

私が滑つたのに巻き込まれて、貴方は地べたに尻餅をついちゃつてましたね。通勤途中なのに、びしょびしょになつてしまつたスーツで、何とか到着すると周りには似たような人がたくさん。

仕事をしながらも、濡れたお尻が気になつてしまつたが、なかつた、と笑つていたのに、翌日には酷い高熱が出て、しばらくお休みすることになつてましたね。それでも、会社に行こうとしたあの時は、心臓が止まるかと思うくらいびっくりしました！

……お願いだから、体は大切にしてくださいね。

一日一日と過ぎていくたびに増える思い出。でも、私の寿命は一刻と短くなつていいく。

もつと傍にいたいよ。

ずっと近くで見守りたいよ。

でも、それは叶わない願いだから、私から貴方にお別れを言います。本当に今まで、たくさん思い出をありがとうございます。

どうか、これからもお元氣で。

… さよなら、大好きな貴方。

+++

「あら、あなた。その靴は……？」

「これかい？ これは、僕が大学を卒業して、就職するときに買つた靴なんだ」

「パパのお靴？ 何か真っ黒だね〜…」

家中の中を整理していたら、懐かしいものが出てきた。まだ取つていたのか、という驚きの気持ちと、残つてくれていたのか、という安堵感のようなものが同時に生まれる。

娘が、薄汚れた靴を珍しそうに見ていた。彼女の周りは今、新しいもので溢れかえっている。物珍しく感じているのかもしれない。数年前に結婚した妻は、何だか臭いそうなその靴を眺めているが、決して嫌な表情はしていない。

「あなたと一緒に頑張ってきた靴なのね。……でも、どうしてから？ 私、この靴を見たことない気がするの

「これはね、一年で履き潰してしまったんだけど、僕が一目惚れして買った靴なんだ。今ほど生活じゃなかつたから、形が崩れたりしないよう毎日手入れをして、靴箱にしまっていたからなあ

「パパの大事なお靴なんだね」

「そうだよ」

そう言つて微笑みながら妻と娘の顔を交互に見、そして箱に入った靴に視線を落とした。

「……懐かしいなあ。僕が、君と出会う前、がむしゃらにやつていた時期に履いていたんだよ。先輩に褒められてさ、浮かれてたんだろうなあ。嬉しくてその足でお祭りに行つてね、たこ焼きをこの靴に落としてソースまみれにしたこともあるんだよ。本当に懐かしいなあ……あのときがあるから、今、いつもやつて君たちと暮らしていられる

「そう……なら、私たちもこの靴に感謝しなくちゃね」

「かんしゃつてなあに?」

「ありがとう、つてことだよ」

分かつたとばかりに満面の笑みを浮かべると、挾むように手を合わせて目を閉じた。

そんな様子を夫婦二人で首を傾げながら見つめる。

「お靴さん、パパと一緒に頑張ってくれてありがとーー!」

娘の明るく、純粹な感謝の気持ちが伝わってきたのか、妻が横でにっこりと笑っている。

一番大変な時期を共に乗り越えてきた相棒。

一番長い時間を過ごしてきた家族。

一番近くで自分を見守ってくれた恋人。

思い返しても、あの一年はとても濃く、苦労も多かったが、それだけ充実していたのだ。

そんな時間を見守ってくれた存在ではあったものの、ありがとう、と口に出して言つには照れくさく、自分も胸の中で感謝の言葉を述べる。

僕も、君のことが大好きだったよ。今まで本当にありがとうございました。
… セヨウナラ。

どこからともなく優しい声で、「セヨウナラ、大好きな貴方」と返事が聞こえて気がした。

(後書き)

予想は当たりましたか?
読んでいただき、ありがとうございました!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1671z/>

私は”誰”でしょう？

2011年12月5日23時28分発行